

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 大井 奈美

大井奈美提出の本論文は、ネオ・サイバネティカルな議論とくに基礎情報学の理論を批判的に応用して、明治期から現代にいたる近現代俳句の分析をおこなったものである。ネオ・サイバネティクスとはおもに「二次観察」概念にもとづく総合的・学際的な研究潮流であり、基礎情報学以外にもオートポイエーシス生命論、ラディカル構成主義心理学、エナクティブ認知科学、機能的分化社会論、文学システム論などが含まれる。本研究はコミュニケーション現象からなるシステムという観点から俳句をとらえる試みであり、文学システム論の新たな分野を切り開く研究と位置づけることができる。本論文は、以下のように、序章、第1～5章、終章から構成されている。

序章では、俳句分析の従来のアプローチを整理し、さらにドイツやオランダを中心とした文学システム論研究の現状を概観したうえで、基礎情報学による俳句分析の特長と狙いをまとめる。

第1章は理論編であり、俳句の分析に基礎情報学を応用するための概念装置を検討する。俳句をめぐる階層的自律システムの誕生と進化として近現代俳文学史をとらえるために、システムの成果メディア、二値コード、プログラムといったネオ・サイバネティカルな諸概念がいかにかに用いられるかを示し、さらに、共進化、包摂関係、階層関係というシステム同士の関係性概念をも、あらたに検討整理した上で再提示する。

第2～5章では、これを受けて、近現代俳句の歴史的な流れを、具体的な俳人や作品に即して分析した。まず第2章では、前史として江戸時代の俳諧を瞥見しその近代俳句につながる意義をおさえた上で、明治初年～30年代中葉にかけて、正岡子規の論文「俳諧大要」に象徴されるような、自立した俳句システムがいかにかに社会的に成立したかを論じる。第3章では、明治30年代中葉から大正時代にかけて、俳句システムが揺籃期をへて確立していった過程を眺める。注目するのは河東碧梧桐らの「新傾向俳句」と高浜虚子らの「伝統派俳句」である。前者における無季自由律の句風は、俳人の観察行為に再考を迫るものだった。また、後者は俳句を大衆化させ、「ホトトギス」などの俳句結社とそれらを結ぶ俳句マスメディアの発達をもたらした。つづく第4章では、確立した俳句システムが進化し革新されていった、昭和初年から戦後にかけての各種の動向をのべる。注目されるのは、水原秋桜子らの「唯美主義俳句」や山口誓子らの「根源俳句」などの新興俳句であり、これを通じて、近代的個人による自己の二次観察、つまり俳人の主観表現としての俳句作品の発展がなされた。ついで中村草田男、石田波郷、加藤楸邨ら人間探究派は時代や社会に即した心理をえがき、その「実存主義俳句」により、近代的俳句システムは真に確立したとあってよい。しかし、第5章にのべ

るように、1960年代以降になると、「近代的個人の主観表現」という俳句観そのものにたいする批判がなされるようになった。金子兜太らの「前衛俳句」や飯田龍太らの「構造主義俳句」以来、表現主体の脱中心化といった傾向が強まり、さらに現在は、俳句インターネット・システムの誕生も影響して、近代的俳句システムが一種の「終焉」を迎えた後にポストモダン俳句として多様な試みが共存している、という状況になっている。

終章では、以上を踏まえて、コミュニケーション現象としての近現代俳句の共時的／通時的な分析結果を概括するとともに、本研究によって文学システム論の可能性が高まること、また基礎情報学が理論的に拡張されたことをのべている。

上記の大井奈美の提出論文は、ネオ・サイバネティクスの文学論のアプローチによって、近現代俳句にたいする新鮮な視座をあたえるものである。とりわけ、俳句分析に関して伝統的におこなわれてきた作家論や作品論が見落としがちだった、個人、共同体、メディアの相互関係を照射できたことは有益である。なぜなら、句作や作品理解において、たとえば俳句結社の師弟関係や新聞の俳句欄の影響はきわめて甚大だからである。本研究では、基礎情報学の理論装置を駆使し、コミュニケーション分析の観点から、明治初期の正岡子規から現代のポストモダン俳人にいたる近現代俳句史を整理分析し、「個人の近代的芸術性」と「俳句結社などの共同体性」と「俳誌などのメディア性」という三者間の相互関係を体系的に論じた。

このような試みは、文学論として、また情報コミュニケーション論として、きわめて斬新なものであり、審査会では、論理性に裏づけられた議論の独自性が高く評価された。加えて、従来のドイツ中心の文学システム論に新たな展望を加え、また、基礎情報学に通時的観点からの理論的深化をもたらしたことも特筆に値する。

他方、大胆で挑戦的な試みであることから、審査会では幾つかの限界も指摘された。論述が不足しているのは、たとえば、川柳など他の文学活動と俳句との関係性、俳諧以来の大衆的俳句における前近代性の考察、創発や適応といった諸概念の応用、リズムや文体の分析視角などである。しかし、これらは、本論文の欠点というより、むしろ研究の過程で浮上してきた問題点であり、今後の関連研究を促すものともいえるだろう。

以上の諸点に鑑み、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。